

「良心に従う」

使徒言行録 23章1節

日本キリスト改革派 国立聖書教会牧師・聖学院大学講師 野島 邦夫

学生の皆さん、皆さんは「何に従って」生きていますか？「何に従って」—たとえば、小さな子供の頃は、お父さんお母さんの言うことに従っていたでしょうし、小学生になれば学校の先生の言うことに従っていたでしょう。中学生高校生になると、もう親の言うことも学校の先生の言うこともあまり聞かなくなります。そうは言うものの、学校の規則には従わなくてはなりません。では、大学生となった今は？

大学生になっても親は親ですし、大学にも授業を担当する先生はいます。親にも先生にも従わなくてはならない、という気持ちはあるでしょう。大学にも規則がありますから、それは守らなくてはなりません。けれども、大学生くらいになりますと、もう親や先生の言うことにただ従っているのはイヤだと言う気持ちになりませんか。大学という教育機関は、ここにももちろん規則はありますが、高校までと違って、個人の自主性や主体性を重んじます。そういう年齢、そういう環境の中で、「私は自分に従って生きる」という思いが育まれて行くのではないのでしょうか。これは大切なことです。

もう少し考えてみましょう。「自分に従って」—「自分に」といってもいろいろあります。たとえば、「自分の感情(=好き嫌い)に従って」。しかし、これでは困るでしょう。好きな人には親切にするが、嫌いな人には嫌がらせをする、機嫌がいい時にはボランティアに励むが、機嫌が悪い時には暴言を吐く、というのでは。せめて、「自分なりのしっかりとした考えに従って」生きたいものです。独りよがりにならないよう、また周囲に流されないよう、正しい知識に基づいて、自分自身で健全な判断をして生きる、とすることです。ところが、これがまた難しいのです。現代では多量の情報が耳に入り目に入ってきますから、とても整理しきれません。また、目に見えるような外からの抑圧や命令は無い時代で、たいてい皆が自分で何でも自由に選んでいると思っていますが実はそうではありません。テレビで製品コマーシャルを繰り返して見させられていると、何となくそれがいいものだと思うようになり買ってしまうでしょう。ブーム、流行に踊らされて、自分で他社の製品と比較検査したわけではないのに、それを買ってしまいます。自分の自由な思いで選んでいると思っけていても、実はそれを手に取るように仕向けられていることが多いのです。こころの中が無意識にそう傾いていますから、自分では気づかないで、自由に選んだと感じます。中には流行に乗り遅れまいと積極的に行動する人もいます。思想やものの考え方でも同じようなことがあります。日本には、仏教は「日本の宗教」だけれども「キリスト教は外国の宗教」という偏見が根強くあります。日本に伝わった時期には大きな差がありますが、共に日本の外の地で誕生した宗教です(インドとイスラエル)。この偏見があつて、キリスト教は日本人にとって馴染みにくい宗教という先入観がまだまだにあるようです。この大学に入って初めてキリスト教に接する人が多いでしょう。そのような先入観がありませんでしたか。

それでは「自分なりのしっかりとした考えに従って」生きるとはいえませんが、流行に流されず、

ブームに「洗脳」されずに生きるには、どうすればよいのでしょうか。私はここで、「(自分の)良心に従って生きる」ということを強調したいと思います。

「良心」という言葉は、皆さん、どこかで聞いたことがあるでしょう。では、どこで？たとえば、お母さんが買い物から帰って来て、ぶつぶつ言います、「Aスーパーが安いと聞いたから、今日初めてお肉を買ってみたら、300グラムって表示してあるのに家で量ってみたら290グラムしかない。いつも使っているBスーパーでは絶対にそんなことは無い、いつもきっちり表示通り入っている、良心的なお店だわ。」また、こういう事件がありました—国産ウナギのかば焼き、と称しつつ実は中国産のウナギを使っていた。中国産のウナギの質が悪いかどうかは別にして、日本産のものよりずっと安いので、そうすればもうかる。しかし、たとえばれなくても国産でないものを使って「国産ウナギのかば焼き」として売るとはしない、ごまかしをしない、このような店を「良心的」とよく言います。

こういう場合、「良心的」とは「ごまかしをしない」というだけの意味です。今考えようとしているのはもう少し深い心の働きの「良心」です。それに近いのは、たとえばこういう場合です—道端に一万円札が落ちていた。誰もいない。拾って、つい自分の財布に入れてしまった。しかし、誰も見ていなかったのだけれども、何となく後ろめたい、「良心の呵責」を覚える。

かつてモノがなかった時代から、モノは豊かになりモノでは満たされないココロが大切にされるようになって、今もそうでしょう。皆さんもココロがモノより大事だと言われるでしょう。けれども、ココロの働きは沢山あるのに、大切にされるのは主に「満足感」です。「良心を大切にしよう」とか「良心を育もう」という言葉はついぞ聞きません。ですから、「良心の働き」と聞いても、「ピンと来ない」とか「そんな曖昧なものがどうして大切な？」と思われるでしょう。そういう中で、私は、「良心に従って生きる」ということを強調したいと思います。

今日の聖書箇所「私は今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」、これは使徒パウロが、晩年近くに自分の生涯を総括して言った言葉です。この「良心に従って」に注目してください。パウロといえば、キリスト教の深さ広さの全貌を始めて明らかにした人です。そのパウロが、もう人生の喜びや愉しみ、また苦しみや悲しみを味わい尽くした年齢になって、自分の生き方を「良心に従って」という言葉で総括しているのですから、きっと最も深い意味で使っているにちがひありません。よく考えるに値します。

では、この深い意味での「良心」とはどういうものなのでしょうか？順を追って考えてみましょう。何よりもそれは、目に見えない、ココロの働きです。そして、何か悪いこと・やましいことをした時、誰も見ていなくても、人がいなくても、ココロが何かに突き刺されたように「ズキッ」とします。(これをふつう「良心の呵責」と言います。)時には、自分でも悪いことだと感じていながらそれをしようとする時、「ちょっと待てよ」とココロの中で声を感じることもあります。これは「良心の声」です。このような良心の働きを不思議だと思われませんか。

このように、良心は誰が見ていなくても働きますから、他の人の働きかけではありません。「良心は神の声であり・神の働きかけ」だと強く言いたいのです。そして、人は誰も、世界の創造者・神に創られた存在ですから、誰にも例外なく「良心」は与えられています。

ただし、一人一人顔かたちが違うように、目には見えない感受性の強さも各人違うように、良心の

働きの強さも人によって違います。時には、「あんなことをするなんて、あの人には良心のかけらもない」という非難の言葉を聞くことがあります。けれども、「良心が存在しない」人間はいません。むしろこう言いたいと思いますー良心の働きは、心掛け次第で働きが鈍くなり押しつぶすこともできるし、心掛け次第で育み鋭くすることもできる。もちろん、良心の働きも、いつも絶対正しく働くとは限りません。間違ふこともあるし、誤魔化されることもあります。けれども、心掛け次第で育み鋭くすることができます。

皆さん、「良心に従って」生きませんか！自分の生き方に、たんなる「自己満足」では困りますが、まず自分で満足すること大事です。そんなことに興味ないと言いますか。しかし、誰もが心の奥底ではそのようなよい生き方を求めていると断言できますーマザー・テレサの生き方を誰もが賞賛しますが、凶悪殺人者を賞賛する人はいません。なぜでしょうか？自分にはできなくても、マザー・テレサの、人を愛する生き方に心は憧れているからです。満員電車の中で、からだの不自由な高齢者が自分の座っている席の前に来た。自分の席を譲ってあげた時何とも言えないすがすがしい気持ちになった、自分もお金を払っているのだから座るのは当然の権利だと無視して後でイヤな気持ちになった、という経験が、皆さんにあるでしょう。なぜでしょうか？誰に言われなくても善い・悪いを知っているからです。そして善い方をすべきだとわかっている、善いことをしたいと願っているからです。これを導くのが良心です。

良心は、一見、目に見えず頼りにならないと思われるでしょうが、実は最も確かな私たちの人生の「水先案内人」です。こういう良心を育みませんか。

しかし、良心も間違いやすく弱りがちです。ではどうすればよいのでしょうか？パウロの回答はこうですー「神の前で」！人を創られ、良心を造られた「神」を見つめて生きることです。そして、キリストを通してこの神を知れ、とパウロは言います。良心に根を与え育むのがキリスト教です。

祈りましょう一天の神よ、ここに集うすべての人たちに、特にこれから社会経験を積んでいく、時には自分の弱さと戦わなくてはならない若い方々に、良心に従って生きる喜びを育んでください。イエス・キリストのみ名にて祈ります。

2016年5月19日 聖学院大学 全学礼拝